図画工作部会

＜県研究主題＞
豊かに感じ取る力を育てることを重視し、児童一人ひとりの資質や能力の育成を図る学習指導と評価の工夫・改善

提案１　　提案者　藤原　有希　（川崎地区）

＜研究主題＞
つくりだす喜び、感じる楽しさを実感できる授業をめざして
～授業づくりの視点を明確にして～

１　提案内容

（１）　研究の取り組み

①　４つの視点（意欲・かかわり・気づき・思考）を明確にして取り組む授業づくり

②「活動途中の鑑賞」と「試しの時間（活動）」の活用

③　ワークシートの効果的な活用

（２）　研究の実践

①　題材名「残そう！思い出！　わくワク枠！」　６学年　　Ａ表現（２）

②　題材のねらい

「自分の思い出をテーマに枠のイメージを広げ、段ボールや黄ボールのよさを生かしたり、思い出の表現の仕方を工夫したりしながら枠をつくる」

③　授業から見えてきたこと

・児童の実態に寄り添った指導計画（目的意識や活動の見通しを持たせる）づくりの大切さ→児童の「意欲」を引き出し、充実感を高める授業へ

・活動途中での相互鑑賞による発想・構想の広がり→言語活動や鑑賞活動による「友だちとのかかわり」が新たな表現活動へ

・「試しの時間（活動）」による材料との出会い→材料・用具の特徴やよさに「気付く」ことで意欲的な活動へ

・書き込み、増やすことができるワークシートの活用→あえて１枚にまとめることで「思考」や「活動」の蓄積とふりかえりを児童自身が分かりやすいものへ

２　協議内容

・『４つの視点』を明確にした細かい指導がされていてよかった。また、一般には『作品＝メイン』『枠＝作品を引き立たせるもの』であるが、この題材では、枠が主役となっていた。

・枠を工夫してつくる上で、この題材の前に取り組んだ『風景画』のための枠であるならば、児童の思いとしては「風景画の作品をよりよくみせるために」の方が自然だろう。枠づくりをメインとするのであれば、枠づくりを先にしてから、入れる作品を作るほうがよいのではないか。
→この題材をつくるきっかけは、クラスの児童の「枠があったらさらによく見える。」というつぶやきだった。しかし、児童の実態から考えると、単に作品を引き立たせるための『枠』ではなく、これまでの６年間の思い出を込め、卒業してからも自分の小学校生活をふりかえるこ

とができる『枠』であってほしいと考え、題材開発した。

・できあがった枠と作品とを合わせて鑑賞した児童の反応は？
→校舎の絵を入れるだけでなく、他の作品（これまでに取り組んだ作品）や写真、作文などさまざまな『自分の思い出』を入れてみたいという児童がいた。

・『枠＝額』と考えると、「作品から枠を思考する」「枠から作品を思考する」…どちらもあってよいだろう。

・「クラスの児童のかかわり」や「思い出を通して友だちとかかわる」ことが作品づくりの基本となっているのが良い。

・４つの視点（観点）をはっきりとさせ、それらを達成させるための手だてとのつながりが考えられている。また、それらの視点をさまざまな場面で児童の活動と関連させながら、表現活動が進められている。

・アイデアスケッチ（ワークシート）に生かされた『友だち同士のアドバイス』とは？
→児童同士のかかわりの時間として「となり同士で」「グループで」「自由に動いて」などさまざまに設定した。その中で児童同士が互いに話をし、気付いたことは、それぞれの作品作りに生かされていた。

・題材名に込めた教員の思いは？
→児童のこれから取り組む作品づくりへの意欲づけになることを期待した。

・ダンボール等の材料の調達とコストは？
→試しの活動に使用した材料は教員が用意した。材料費は児童一人あたり２５０円程度。

・『枠』そのものに存在感があった。今回のように「入れるものを定めず…」であるなら、枠の形も四角だけではなく、素材の特徴をいかして、形を工夫する・重ねるなどさまざまな工夫ができそうだ。

３　まとめ

・６年間の積み重ね（経験・知識など）をどう生かすかが、作品に表される。

・作品づくりのための題材・材料・道具などを、６年間を通してどのように児童に体験させるかの見通しを学校全体としてしっかり立てることは大切。

・今回、児童の作品作りのための『試行錯誤の時間』をたっぷりととったことはよかった。低学年では、自分の思いやひらめきをもとにすぐに造形活動に入るが、高学年だからこそ自分の思いをあたためる時間を大切にしたい。

・児童の小さな気付きから、題材が生まれた。『枠』を主役として、自分の６年間の思い出や思いをあらわすための作品となった。教員が児童の実態に寄り添うことで、児童は、より深く思いを作品に込めることができた。

・教員が『参考作品』を提示するときは、児童がイメージを十分に広げることができるよう配慮したい。

・児童の活動がどの『ねらい』にあたるものなのかを、教員がしっかりと持っていることが大切だ。今回の提案では、『４つの視点』を設定することで、児童につけさせたい力が明確になっていた。また、活動途中での相互鑑賞やワークシートによる見とりなど、さまざまな見とりの工夫が示されており、図工の学習を進めるにあたり教員として持っておきたいところである。

提案２　　提案者　堀　宏輔（湘南三浦地区）

＜研究主題＞
表現する喜びを味わう図画工作の授業を目指して

１　提案内容

（１）　テーマについて

造形活動を展開していく際に、どのように表現したらいいのかイメージがもてないという児童がいた。その根底には自分の表現に対する自信がないことや絵を表す際もそっくりに描かなくてはならないという先入観があることが分かった。そういう思いを抱いている児童に、表現する喜びを感じることができるようにするためには、どのような題材を設定すればよいのだろうか。そこで、「図画工作に対して自信がなかったり、苦手意識をもっていたりする児童が、表現する喜びを味わえるような題材を設定すること」を目指すことにした。児童に様々な素材や用具と出会わせ、表現できる幅を広げることで、自分なりの表現を獲得することを柱にした年間指導計画を作成した。

①　指導方法の工夫

児童が表現することに自信がもてるよう、指導する際はプラスの声かけをするようにした。自分の表したいことを見つけたり、つくりながら想像をふくらませたりすることができるように、材料の特性を知り、用具に慣れることができる試す時間を十分に確保した。作品の制作途中にお互いの作品を見合い、自分の作品に生かせるところを探す場を設定した。

②　評価の工夫

制作途中の児童のつぶやき、児童への聞き取り、児童同士の関わり合いなどを記録し、評価に生かした。

（２）　実践報告

①　「勇気～アクリル絵の具を使って自分の表現を見つけよう～」

いろいろな方法を試すことができるようにした。筆以外の様々な用具を使って絵の具遊びをする。何枚も試せることによって、新しい方法を発見し、その方法が自然と友だちに広まる様子が見られた。出来上がった作品の気に入った部分をトリミングによって切り取ると、違った良さに気付くことができた。切った紙を台紙に並べて貼ることで構成も学べていた。

②　「粘土絵～土から絵の具をつくってみよう～」

イネ作りの学習の際、泥を嫌がる児童がいた。土に親しんでほしいという願いがあり、事前に「土とふれあう」という題材を設定して、土粘土にたくさん触れて遊ぶことを体験させた。「粘土絵」の題材では、お互いに見合う時間を設定した。その際、技法や用具の使い方等取り入れてよいことを伝えた。

（３）　成果

①　自分の表現したいことを試す時間を十分に確保することで、自分の表現に対して自信をもてるようになった。また、抽象的な表現の題材は苦手意識のある児童にもハードルが高くならず、自信をもって表現できたようだった。

②　グループにすることによって、他の児童の作品づくりに影響しあっていた。なかなかか活動の進まない児童にとっては、他の児童が使っている道具や技法を真似ることができ、そこから自分の表現につながる姿を見ることができた。

③　年間計画の中でつながりのある題材設定ができたので、児童は躊躇なく活動に取り組むことができた。

（４）　課題

毎時間、児童一人ひとりを見取ることは難しいと感じた。評価方法の工夫が必要であると感じた。

２　協議内容

（１）　年間計画について

・浜之郷小学校の特色があるとは思うが、年間指導計画はどのように作成しているのか。

〇素材、材料は共通して同じにするが、題材名がクラスのよって違う場合がある。事前に学年で相談して計画していく。教科書の題材を行う場合もある。

・土にこだわっている部分が大きいのではないか。

〇砂と油絵を混ぜて絵をかくという描き方に出合い、実践に取り入れたいと考えた。児童の実態として、土が大好きな子と嫌いな子の差が激しいので、土に親しんでほしいと願った。

（２）　題材について

・導入部分はどうであったか。

〇アクリル絵の具で遊んだ時と同じように、本気で粘土と遊んでみようと投げかけた。文字は書かないようにしようという条件設定はした。

・筆を取り入れた意図はあるのか。

〇アクリル絵の具は伸びがいいが粘土は伸びがないという特徴があったので、道具に筆を入れた。実際はスポンジや指を使う子も多かった。

・自分の作品を友達のものを見て変えてしまった子は本当に楽しめていたか。また、遊びの中から思いつくものもあるが、この題材ではいつイメージをもったと考えられるか。この題材がＡ表現（２）の題材ととらえると、どうであったか。

〇自分の作品を友達のものを見て変えた子は自分の作品を否定したわけではなく、発想を変えたということで、十分楽しめていたと思う。

３　まとめ

（１）　児童の実態に合わせ、田んぼ（総合）だから「土」という自然の流れがあった。素材から発想させる題材で、試してみる、遊んでみるということが出発点になっている。造形遊びのようにやりながら立ち上がっていたもので、最初から発想した子もいるだろうが、多くの素材に触れる、試す、繰り返し使う、何度も試すという造形遊びのような活動から発想していた子が多かったように思う。材料から発想・構想する題材といえる。

（２）　資質能力をどのように見取り、指導していくのかを考えるとき、「始まりにおける発想・構想」の段階では、どんな思いをもっているのか、どのように生み出していくのか、手立てはどうであったかを考えることが大切である。同時に「途中の段階での発想・構想」や「創造的な技能」、「共通事項」についても意識して指導することが大切である。触覚を大切にしていく。

（３）　児童の実態に合わせて題材を設定することは必要であるが、年間計画はバランスよく立てることが大切である。鑑賞は、独立した鑑賞も取り入れていくようにしたほうがよい。

（４）　児童がお互いに自然と学び合う場として、グループ形態を工夫していた。共に学び合う指導の工夫は重要である。